

渋谷五族プラス・ワン



白男川 孝仁

一、はじめに

平成27年に鹿児島県で、第30回国民文化祭が開催され、出水市は『鶴のまち俳句大会』と日本舞踊の会場となった。

それまで俳句は全くの門外漢であった私だが、地元の一員として一緒に盛り上げようと初投句を試みてみた。

ただ、偶然出会った高校の同級生が、季重なりの迷句を見かね、その後『俳句会』なるものに誘ってくれた事が幸いであった。

『夕鶴俳句会』は、毎月一回出水市中央図書館に於て、鹿児島市の俳句結社『河鹿』の

主宰・淵脇護先生が、直接ご指導下さる勉強会で、期待も緊張も高まった。

出席してみると、女性だけの中の黒一点であったが、皆さんから歓迎していただいた。

『王様の湯上りを待つメロンかな』（夏）

我々にとって高嶺の花であるメロンを頂いたので詠んでみたのだが、予想に反して大好評であった。

元来の勉強嫌いだったので、『誉められて伸びるタイプ』のワガママ野郎である。

最初が誉められて良かった。

そして次回には『月一回の勉強では物足りません。』と言ってみた。

すると句会終了の後、常宿に招かれ、『貴方の本気度が嬉しいので、ファックスを使った個別指導をします。』と言って頂いた。

私は前もって辞典の文法欄をコピーして持参していたが、先生は大笑いしながら『そんなもん放っておけ。文法なんか後回しだ！』とおっしゃりながら、直ぐに二人で宴会となり、俳句の何たるかを熱く熱く語り始めて下さった。

『君には俳句を正しく厳しく教える。』とお約束ただいて、もう7年が経つ。

専用の用紙を自分で作り、一枚8句の添削紙を何百通送受信したのであるうか？

ファックスが壊れ、今3台目である。

先生から頂いた俳句集は、全てノートに転記して付箋を付けて質問してきた。

面倒臭がりでアンドシゴロの自分が、初めて俳句だけ、いまだにワクワクしながら続けている事が不思議でならない。

俳句の上達法は『多作・多捨』といわれ、淵脇先生から『下手な鉄砲、数打ちや当たる。』

と言われ続けているので、『はい！マシンガン投句致します。』と、NHK全国俳句大会、宮若全国俳句大会や県内外の俳句大会に投句し、運良く入選も続いている。

その後、(社)全国俳人協会の入会や『河鹿』同人のご推挙を受けたが、いまだに作句の苦勞も知らず、先生の手の平の中で遊び惚けている子供のまま、八年目を迎える『俳句の新参者』である事に違いない。

『子らに説く知足の教え生御霊』(秋)

二、梶原宣俊さんとの出会い

炉ばたセイ談第16号で喜多流能楽謡教士の梶原宣俊さんが、私との出会いをご紹介下さり誠に恐縮であった。

『夕鶴俳句会』の学級長(世話人)を引き受けたとたんに、出水市文化協会の手伝いを

する破目となり、文芸部長や理事まで押し付けられてしまった。

そして協会の新年会で梶原さんとお会いし俳句会へのご参加を勧めた次第である。

出水市に『能楽謡教士』という方がいらっしやる事自体が不思議であったが、能に無知ながら内なる好奇心が目を醒ますであろうという予感は、的中した。

そして、出水喜多会の一弟子として、能楽の謡うたの勉強が始まった。

能楽の謡うたとは、お坊さまの読経と同じ『腹式呼吸』が原点である。

話が少し逸れるが、自分自身の不思議体験の一つに、還暦過ぎての声変りがあるが、古い友人にしか分からぬ事ではある。

カラオケでは、フォークが好きなのだが、高音部になるとニワトリの首締め状態で『ヒイー』と声が擦れるので、『キー』を低目にし

て歌っていた。

還暦過ぎた頃に体調を崩し、自宅で下手なピアノで作曲などして遊んでいたら、友人より合唱への参加を強く勧められた。

笑いながら『ニワトリ声』を訴えたが、全く聞き入れて貰えず、『ハモリ』を教えて貰う条件で、怖々参加してみた。

するとどうであろうか？ 合唱の発声は『腹式呼吸』で喉声を使わず、身体を楽器として歌う方法であり、低高部も高音部も伸びやかに出て、いきなり高音のテノールパートを任せられ、その歌声も誉められた。

カラオケの『キー』は、松山千春だと-4だったのが、+2へ6音も上がり『ニワトリ』もいつの間にか居なくなっていた。

また、『カンニング・ブレス』という方法で目立たぬような息継ぎを教えて貰った事で歌の時も能の謡うたの時も、途切れぬように声

を出し続ける事が可能となった。

喜多流の謡いは武士の謡いで男らしく力強いのだが、私はどちらかと言えば高音気味の子役とか、女性的な和吟が得意だ。

去る10月24日（日）、かごしま県民交流センター県民ホール能楽堂に於て、第68回鹿児島謡曲連合会大会が開催された。

梶原先生との連吟で、出水喜多会として、『花月』、『黒塚』の発表である。

昨年はコロナ禍で中止であったが、一昨年の『高砂』、『鬼界島』に次いで二度目の発表となった。

鹿児島謡曲連合会の会長・中西喜彦先生は炬ばたセイ談会の会長でいらっしやるが、新米の私にとっては雲の上の方で未だご挨拶も叶っていないので恐縮の至りである。

今後、ご挨拶を済ませた上で、お伺いしたい事があるのだが、私共の発表の後、独調『千

手』をお謡いになられた中西恵子氏の事である。

私は初心者レベルなので、舞台では終始教本とニラメッコ状態で謡っている。

地謡いは合唱団で、皆と呼吸を合わせて『同音』をご披露せねばと努力中なのだ。

中西恵子氏は中西会長のお嬢様でいらっしやるのであろうかと思いつながら拝聴していたが、独調の際もお手許に教本などは無く、胸を張って朗々と吟じておられた。

勝手乍ら、将来の大きな目標とさせて頂こうと心に決めた。

『際立てるシテの摺り足月冴ゆる』（冬）

三、渋谷五族プラス・ワン

私は出水市で生まれ育ち古稀を迎えた。

白男川家の本家跡は高尾野町唐笠木にあ

り、現在小さな納骨堂と古墓30基程の管理などを私が引き継いでいる。

亡き祖父母からは、『宮之城に白男川城があり、世が世であればお前は城主だった。』と聞かされていた。

七人兄弟の長男の父に、娘二人が生まれた後の男児は目一杯溺愛されてたようだ。

子供には田舎の城趾に興味などなく、図書館で父に調べさせられた人名事典で、『白男川家は桓武平家で渋谷の一族』の記述を見つけ、源義経好きの少年は大いに残念がった。

50歳を過ぎた頃、一度は祖先の地を確かめてみたくなり、宮之城の白男川地区を訪ね、城趾も見て、歴史資料館でお話を伺った。

資料の一部をコピーで頂き、白男川家は渋谷一族の一城主として島津と対峙したであろう事は分かったが、詳しい続柄と、後にこの地から移転した事由は分からなかった。

『秋風や訪ねし父祖の城の趾』（秋）

最近になって、梶原さんより『炉ばたセイ談』を見せて頂くようになり、入来院家の事や重朝庵主、貞子様の記述を貪るように読んでいた。

とりわけ貞子様のご学友H氏についての記述には心当りがあり、驚愕した。

昔話で恐縮だが、出水高校の三年生になって、世の中の事を自分の目で確認したくなり実証行動を開始した。学生運動である。

卒業まで授業などほとんど欠席して、東京・大阪・福岡など県内外を走り回っていた。

また、大阪や福岡の『前進社』にも出入りして、未だ会った事のないH氏のカリスマ像に憧れていたのだ。

貞子様のお話では、H氏はその後内ゲバで

亡くなられたとの事であったが、私は暴力や破壊が大嫌いで、言葉で説得できぬ世界に段々と嫌気がさし、その後娑婆の凡夫に戻り家庭を持ち、現在に至っている。

『ゲバラにも医師にもなれず冷奴』（夏）

当時このような話を人様に語る事など、一生無いと思っていたが、お会いできなかつた貞子様が炉ばたセイ談にご降臨されていらつしやる前では、凡夫の隠し事など卑怯で、笑止であろうと思ひ、今回の寄稿を決めた。

入来の里は放蕩人生の自分には極めて敷居の高い聖域ではあるが、渋谷五族プラス・ワンのご縁でこ挨拶が叶う事を願ってやまない。

※御降りは正月に降る縁起ものの雨
『御降りや茅門伝ふ水の綺羅』（正月）

（しらおがわ・たかひと

出水市文化協会 理事

俳句結社『河鹿』同人）

